

日和田キャンプ場の歴史について、今回の「おまつりキャンプ」の写真と共に加藤総主事に語っていただきました。

名古屋YMCA 日和田キャンプ場について

名古屋YMCA 総主事 加藤 明宏



1973年（昭和48）長い間親しみ愛されてきた「若松海の家」が閉鎖された。そして1979年（昭和54）若松の土地は7,200万円余で売却された。この頃からキャンプ委員会を中心に新しいキャンプ場建設の夢実現のため、数10か所の候補地が物色された。1980年（昭和55）9月、多くの候補地から日和田高原が選ばれ、名古屋鉄道株式会社から優遇価格で取得した。日和田高原キャンプ場は標高およそ1,400メートル、御嶽山の北側裾野に位置し、広さ429,949平方メートル（約13万坪）である。

キャンプ場建設は名古屋YMCA80周年記念事業の一つとして進められ、1982年（昭和57）6月、鉄筋コンクリート造り延面積713.02平方メートルの中央管理棟（竹中工務店施工）とキャンパーの生活基盤となる10基のテントからなるキャンプエリアの造成（高根村森林組合および高根工芸施工）が竣工した。総費用は約2億1千万円で、80周年記念事業で用意されたほとんどがこのために投入された。

キャンプ場建設は名古屋YMCA80周年記念事業の一つとして進められ、1982年（昭和57）6月、鉄筋コンクリート造り延面積713.02平方メートルの中央管理棟（竹中工務店施工）とキャンパーの生活基盤となる10基のテントからなるキャンプエリアの造成（高根村森林組合および高根工芸施工）が竣工した。総費用は約2億1千万円で、80周年記念事業で用意されたほとんどがこのために投入された。

<以上 名古屋YMCA100年史より抜粋>



キャンプ地取得から30年の月日が流れ、子どもたちを取り巻く環境や社会の状況も大きく変化しました。名古屋YMCAもその団体としての規模も大きく変わり、今日和田キャンプ場は主に7月中旬から8月のお盆明けまでの約1か月間、スタッフやリーダーが常駐して幼児から中学生、父と子キャンプやファミリーキャンプ

を実施しています。開設時に建設したテントベース（木材）は、永年の風雨や雪に晒され、朽ち果て何年か前に撤去しました。そして主に長期キャンプ（今夏はエンジョイキャンプ・5泊6日）で使用するテントベースを別途作成しています。この間新しい施設として、プログラム棟、クラフトセンター、名古屋ワイズメンズクラブ寄贈の「名星舎」などが建

てられましたが、近年はボイラー不具合による新しい温水湯沸かし器の設置などに限られています。



思います。残念ながらキャンプ参加者は低年齢化し、キャンプ日数も少なくなりましたが、



ファミリーにとっても、貴重な教育・成長の機会としての組織キャンプをこれからも大切にしていきたいと考えています。



私が日和田キャンプ場内で見た動物は、ニホンカモシカ、ニホンザル、イタチ、リス、タヌキ、ウサギなどなど、自然に恵まれたキャンプ場は昆虫や植物の宝庫でもあります。熊まではまだ見ていません。30数年前、中高生や若者を主な対象として環境教育にその主眼をおいたキャンプ場の開設は、当時としては画期的なことであり、今なおその理念は崇高だと

低年齢を対象としたキャンプであっても、日和田の環境を十分に使って「人と人をつなぐ」「人と自然を考える」キャンプを実施しています。また東日本大震災や福島原発の事故を経験した私たちは、家族の絆や緊急時の「いのち」「生活」を守る術としてのキャンプ技術や生活を、より大切なものとして考えていく必要を改めて知りました。低年齢の子どもたちや

名古屋グランパスワイズの方々には、おまつりキャンプでのご奉仕や開設準備でのボランティアに積極的に関わっていただき感謝申し上げます。これからも「人と人をつなぐ」キャンプ場の運営にご協力いただきますようお願いいたします。